

不条理の論理 —グリゴリー・オステルの世界

毛利公美

1. 作家について

グリゴリー・オステル (Григорий Беницианович Остер) は1947年11月27日、黒海沿岸の町オデッサで生まれ、少年時代をロシア有数の保養地ヤルタで過ごした。少年時代のオステルは、ヴォズネセンスキーやヴィクトル・ネクラーフなど、この避暑地に休暇を過ごしにやってくる作家や詩人たちのたまり場に出入りして、自分も詩を書き、その方面ではかなり名前を知られていた。北方艦隊での兵役を終え、一九七二年にゴーリキー文学大学に入学しようとしたときには、少年時代から目をかけてくれた錚々たる顔ぶれの文学者たちから推薦状が送られてきたという。最初の頃オステルが書いていたのは「大人のための」詩であり、詩集《Время твое》(Мурманск, 1974)も出版されている。しかし、イデオロギーの制約を受けた詩作の可能性に限界を覚えたオステルは¹、次第に子供向けの作品に方向転換を図り、アニメのシナリオや人形劇の脚本を書くようになる。とくに有名なのは、サル、オウム、子象、ウバミの4匹が登場する動物アニメのシリーズである。これは今でもときどきテレビで放映され、4匹のぬいぐるみ付きの絵本も売られている。体つきも性格もそれぞれに異なる4匹の交流を描くほのぼのした作品だが、オステルの特徴であるナンセンスなジョークや言葉遊びもふんだんにちりばめられている。

オステルは非常に多作な作家で、毎年次々と新しい発想でヒットを飛ばしつづけているが、彼に一躍人気をもたらした代表作といえ、ソ連時代のいかにも教訓めいた啓蒙書に逆らって全く逆の発想で書いた『悪い子のすすめ (原題 Вредные советы)』だろう。作品自体はかなり前のペレストロイカ以前に書かれたが、反教育的で政治的寓意がこめられた内容であるため、当時は公にできなかった。そして、ペレストロイカ後に出版されるや大変な人気となって版を重ね、現在はその続編もパート3まで刊行されている。

オステルの作品の特徴は、ふんだんな言葉遊びや、常識を逆手に取った独特のユーモアにある。既存の慣用句を文字通りの意味で用いることによって生じるナンセンス、過去の言説や教科書などの形式のパロディー、社会の矛盾や人間の醜さ愚かさを強調するブラックな笑いは、子供だけでなく大人が読んで楽しめるものであり、それがオステルの高い人気をもたらしていると言える。独特のナンセンスなブラックユーモアは、ハルムスらオベリウの系統につながるものと評価されている²。

『悪い子のすすめ』と並んで人気が高いのは、『算数の問題集—教科書っぽくない教科

¹ オステルはインタビューで児童文学に転向した理由を聞かれ、当時の状況を揶揄して次のように語っている。「当時の詩には二つのテーマしかなかった。ひとつめは愛、もうひとつは党。ちなみに愛というのは党への愛を意味するわけですが。」(В КГБ меня обязали учиться на 4 или 5// Вечерний клуб. 24.2.1996.)

² Словарь русских писателей XX века, (статья Г. Кауровой), с.152.; Е. Кузьменкова. Ужасно неизвестно все то, что интересно!// Дошкольное воспитание. 1993, №7, с.74.

書』である。これは、実際に解くことができる算数の文章題を集めたものだが、問題の内容はふつうの算数の問題とはかけはなれたユーモアあふれるものである。『算数の問題集』の後、教科書、問題集などの形を模した“教科書”を次々に発表している³。最初は『物理』『体育』など、外枠は既存の教科の枠組みを用いていたが、その後、1998年からは始まった『生涯学習シリーズ (Серия «Наука на всю жизнь» М.: «Росмэн»)』では、『パパママ学 (Папамалогия)』『アパート学(Квартироведение)』『飴食学(Кофетоедение)』など、独自の“学問”を考案している。いずれも実際は存在しない奇想天外な学問だが、オステルは豊かな想像力を駆使して、それぞれのテーマを様々な角度から照らし出してみせ、それによって世界に新鮮な輝きを与えることに成功している。そこにあるのは、まだ常識に曇らされず、なんでも「なぜ？」という目で見ることが出来る幼い子供の視点だ。その一方で、文体的には「学問的な参考書」を模し、各章の終わりには学んだことを確かめるための「質問コーナー」が設けられているという念の入りようで、当たり前のことを学問的な発見のように大げさに言いたてる文体（「最近、飴の食べ方の研究者たちは、歯がなくても飴は舐めればいいのだという事実を発見しました」など）は独特のおかしみを醸し出している。

オステルの作品の多くは、悪戯で反抗的で言うことを聞かず、汚いものやグロテスクなものを喜ぶ「悪い子」が中心にすえられている。クズメンコワが述べているように、「オステルは子供の目線に自分を合わせて子供を甘やかしたり叱ったりはしない。逆に子供のほうが背伸びしてオステルが語るおとぎ話や人生の話を夢中で取り込もうとする。」⁴実際、子供が驚くほどませた発言をして大人をたじろがせることはよくあるが、オステルの作品の中では、子供が大人と同列の、あるいはそれ以上の存在として描かれ、彼らはしばしばたたかに大人を出し抜く。逆に、大人たちは、まるで子供のように描かれたり、子供の理屈では計り知れない不可思議な存在として描かれる。現実の大人と子供の関係においては、大人は常に子供の優位に立ち、大人の常識で子供をしばろうとするものだが、オステルは逆に“子供の常識”に照らし合わせて大人を評価してみせるのだ。

パパ、ママをはじめ、周りの大人たちを観察してみようという趣旨で書かれた『パパママ学』の中では、大人の行動の不思議さが「玩具」を通して次のように語られる。「ためしに大人の前にブロックをばら撒いてみるといい、ふつうの大人が知っているブロックの遊び方といたら、たったひとつ、全部箱に入れるだけなんだから。」子供にとって玩具は第一に遊ぶための道具であり、遊ぼうとせずに片付けることしか考えない大人は、玩具の使い方、遊び方を知らない愚かな存在なのだ。

オステルは様々なインタビューの中で、子供は大人より経験が少ないだけであって決して大人より劣った存在ではないのだと繰り返し語っている⁵。「子供の頭脳はステレオタイプに侵されていないので、大人が予想もしないようなことをやってのける」⁶というオステ

³ すでに出版されたシリーズの裏表紙に載せられた予告によれば、Врительатура, Воспитание взрослых, Хваталгебра, Ничегоневедение, Ангузский язык, Сорифметика, Карманотомия, Схлопотаника, Увиливание, Навсеначхимия などが企画されている。

⁴ Е. Кузьменкова. указ. соч. с.73.

⁵ Григорий Остер: Вакцина от глупости, или эксперимент на собственных детях. (интервью) //ТВ Парк, 1999.3. (http://online.ru/issue/tvpark/03_99/tvp03_1.htm); «В КГБ меня обязали...»

⁶ «В КГБ меня обязали ...»

ルの言葉は、オステル自身の創作にそのまま当てはめることができる。常識の目に曇らされていない子供の視点を通して描くことにより、まわりの世界は「異化」され、新鮮なものとなるのだ。とはいえ、上に述べたように、その視点は決して純粹無垢なものではなく、子供らしい無邪気な発想のなかに大人の世界の理屈が混ざることによって、しばしば不条理なユーモアが生まれる。

固定した概念が取り去られると共に、事物のあいだに敷かれた便宜的な分類や定義づけも意味をなさなくなる。その結果、オステルの作品の中では、しばしば異なるレベルのものが同列に扱われる。たとえば長編『詳しいお話』では、動物園のメリーゴーラウンドの馬として、マーシャ、ダーシャ、サーシャ、パーシャ、グラシャ、ナターシャと実在する名前が続いた後で、ひとつだけ「プロスタクワーシャ（ヨーグルトのように酸化させた牛乳）」という名前らしからぬ名前が混じる。また、架空のある町の子供たちの日常を描いた『月桂樹通りの伝説と神話（Легенды и мифы Лаврового переулка）』の冒頭章「伝説はどうやって生まれるか（Как получаются легенды）」で、作者は世の中にあるものとならないものの区別について、読者の考えを次のように導く。

猫はよくあるもの。白い猫、茶色い猫、黒い猫がいる。それから白と茶色と黒が混ざった猫もいる。それから白地に黒の模様のもいる。その反対の模様もあるね。それに縞々の猫もいるよね。だけど格子縞の猫はいない。まん丸模様の猫(кошки в горошек)もやっぱりいないよね。でもまん丸のグリーンピースの缶詰(зеленый горошек в банках)はよくあるぞ。コーンの粒の缶詰もあったな。… (c.6)

どちらの例においても、論理的な思考による分類よりも言葉の響きの類似や連想が優先され、自由な発想の飛躍によって、まったく違う概念が隣り合わせに並べられている⁷。

オステルの作品においては、やってはいけないとされることはやらなくてはならないことに、当たり前なことはふしぎなことに、大人は子供のような無邪気な存在に、無邪気なはずの子供は理屈っぽくてしたたかな存在になる。無意識に用いられている言葉や抽象的概念は意識化されて具象的なイメージをとる。いずれの点においても、オステルの作品の根底に流れているのは、常識化され固定化されたものの考え方をことごとくくつがえす逆転の発想と、それに強引に説明をつける独特の論理的思考であり、その説明がつまらない屁理屈に終わらないのは、それがユーモアと優れた言語感覚に支えられているからである。

以下、次章では、オステルの代表的作品について詳しく紹介を試みる⁸。

⁷ ハルラーモフは、様々なレベルのものが同列に並べられるオステルの文体の特徴を «куча мала»（子供がどんどん上に折り重なっていく遊びの一種）と名づけている。（*Римма Харламова. Благослови детей и зверей. О творчестве Остера // Детская литература, 1993, №4, с.18.*）

⁸ ここに取り上げたのはよくとりあげられる代表的な作品だが、これ以外にも既存の怪談や迷信をパロディーにした『迷信集(Приметы и суеверия)』や『怪談集(Школа ужасов)』など、多数の作品がある。『怪談集』については本論集所収の越野剛「ロシアの子供の怪談（ストラシルキ）」に紹介がある。オステルの作品は現在 «Росмэн», «АСТ」といった出版社から数多く出され、版を重ねている。『悪い子のすすめ』など、一部の作品は、ソ連時代から地下出版で出回っていたようだが、実際に作品が書かれた年や初版年のデータの調べがつか

2. 主な作品と解説

(1) 『しっぽの体操』 Зарядка для хвоста

サル、オウム、子象、ウワバミの4匹が登場する人気アニメのシリーズを物語化したもの。アニメ自体はペレストロイカ以前に放映されていたものであるため、最近の作品に比べれば毒気が少ないが、オステルの独特のユーモアや既存の概念をひっくり返す逆転の手法はすでに顕著である。それぞれのエピソードで語られるストーリーはいずれも単純なもので、その発想の源は、しばしば、既存の慣用表現や慣用化された認識に求められている。

第一話「知り合いになろうよ(Будем знакомы)」では、まず作家自身が小さな読者たちに自己紹介した後、次のように語る。

たぶんきみは何かお話を聞かせて欲しいと思っているんじゃないかな。もしその通りだったら、聞かせてあげよう。でも、そうじゃなくて、君が“お話なんて聞きたくないや”と思っているのなら、別に聞かなくたっていいんだ。お話はどこにも行きやしない、ちゃんと待っていてくれる。聞きたくなったときにまた来ればいいさ、そしたら最初から最後まで聞けるからね。でもさ、尊敬する子供くん、あんまりいつまでもぐずぐずしてるんじゃないぞ。そうしないと、大人になっちゃって、サル、オウム、子象、ウワバミのお話なんてあんまり面白くないやって思っちゃうからね。(c.5)

オステルは、既存の物語のように「さあ聞かせてあげよう」という押し付けがましい態度をとらず、子供の自主性に任せようとする。「聞きたくなければ聞かなくていい」と言われると却って聞きたくなる“天邪鬼”の心理を逆に利用して、聞き手の好奇心をそそるわけだ。逆効果を狙うそのスタンスは、『悪い子のすすめ』にも通じるものである。

続いて、4匹の動物たちが登場する。動物たちはいずれも小さな子供のように擬人化され、仲良く遊んだり、いろんなことを考えて悩んだりする。第一話では、4匹がいつものように遊んでいるとき、サルがとつぜん「残念だな、ぼくたちが知り合いだなんて」と言い出して、仲間を驚かせる。誰かと知り合うのはとても楽しいことなのに、一度知り合いになってしまったらもう知り合えないから、というのだ。結局、彼らは相談の上、一度「別れて」からもう一度「知り合う」ことにし、偶然を装ってわざと出会ってから、大満足で「はじめまして」と挨拶を交し合う。そして「それは本当にとっても気分がいいことだったので、それからみんなは毎日2回ずつ知り合いになりました。」何度も改めて「知り合う」というナンセンスな結末は、「知り合いになる」という言葉の意味を逆に考えさせ、一度しかできない行為と繰り返し何度でもできる行為があるのだと悟らせる。

第五話「ゾウさん、どこ行くの(Куда идет слоненок)」は、方向(куда)を伴って用いられる定動詞 *идти* と不定動詞 *гулять* の違いを意識化させる。どこへ行こうか自分で決められないサルは、オウムの後について行くことにするが、オウムは考え事に没頭して同じところを行ったり来たりしていただけだったため、サルは途中で不安になって考える。「ぼくた

なかったもので、出版年は敢えて記さない。なお、『悪い子のすすめ』は、多数のインターネットのホームページでも閲覧できる。

ちはどこへ行くところなんだろう？」一常に方向性を伴う *идти* という動詞の概念は、目的もなくただ単に歩くという行動を表すことができない。どこに向かっているのかを具体的にイメージできないサルは、すっかり混乱してしまう。そこで立ち止まったオウムが「そう、それが問題なんだ、いったいどこへ行こうとしていんだろう」と言い、2匹はより具体的な例として子象を呼んで、子象が歩いているところを想像しながら考えようとする。最後にウワバミが「だって、ゾウくんはただ歩いてるんじゃないよ。散歩してるんだよ！ (...он не просто идет. Он гуляет.)」と思いつき、みんなが納得する。

この話については、面白いエピソードがある。この作品がアニメとして作られたとき、「ぼくたちはどこへ行くところなんだろう？」というこの話の主題が、ソ連という国の誤った方向性を揶揄するものとして問題になり、上映禁止になりかけたのだ。そこでオステルは当局に出向いて「私の作品を見てそんな不埒な連想をしたのはどこのどいつかかせてくれ」と詰め寄った。当時、そういった“告げ口”はもっぱら電話でなされ、書類に残されなかったため、結局、当本人をみつけることができず、映画は無事に公開された。⁹

一方、カウロヴァは、同じ第五話を例に引き、「どこへ行こうとしていんだろう」と思索するオウムは目的のない人生は無意味だという考えを表しており、それに「ただ散歩しているだけ」の象を対置することによって、人生は目的などなくても素晴らしいものだという考えが表現されているという見方をしている¹⁰。とはいえ、言うまでもなく、オステルの作品の魅力は隠された寓意や教訓そのものにあるのではなく、教訓性を意識的に取り払って、表面化に深く隠したり、逆説的に表現するその手法であり、それを可能にしているのは言葉に対する高い意識である。

(2) 『詳しい話』 Сказка с подробностями

動物園の園長がメリーゴーラウンドの馬たちにせがまれ、閉園後にお話を語って聞かせるという設定。「最初の章」で馬たちと園長が導入され、園長が「もうネタ切れだから、お話は今日が最後だよ」と言って「最後のお話」を語り始めるまでの彼らの会話が記される。次の章は、園長が馬たちに語った「最後のお話」だが、「最後のお話」であることを受けて、章の見出しは「最後の章」とされている。常識からの“論理的な逸脱”を得意とするオステルらしい題の付け方だ。園長の「最後のお話」は、フェージャという名前の小さな男の子が動物園で母親にアイスクリームをねだったのに買ってもらえず、ダダをこねるところから始まる。腹を立てたフェージャは周りのあらゆる人や物に喧嘩を売り、ついには彼をたしなめようとした地球にまで悪態をついて、宇宙空間に出て行ってしまふ。空っぽの宇宙で怖くなったフェージャが泣きながら母親に許しを請うところまで園長が話し終えたとき、いよいよ「最後のお話」が終わってしまいそうだと予想をつけた馬の頭（プロスタクワーシャ）が悪知恵を働かせ、「最後のお話」の中にいけば「副次的登場人物」として登場した者たちについて「詳しい話」を聞かせてほしいと要求する。ひとつの「詳しい話」

⁹ «В КГБ меня обязали ...»

¹⁰ Словарь русских писателей XX века (статья Г. Кауровой), с.151.

が終わるごとに、プロスタクワーシャはまた別の人物について巧みに質問をしてその「詳しい話」を聞かせてくれるように仕向け、園長は聞かれるままにどんどん「詳しい話」を作り出す。こうして全部で42の「詳しい話」ができあがったところで夜が明け、園長はお話の登場人物全員が眠ったことにして話を終わらせる。

この物語は、全体として、寝る前などに、子供にせがまれて大人がでたらめな作り話をしているという雰囲気に近い。園長のお話には、善良な警察官、元気のいいお婆ちゃん、わがままできかんきな子供など、オステルの作品によく登場する人物像が勢ぞろいしている。それぞれの章は独立したエピソードになっているが、登場する人物はきちんと関連しあっていて、全体でひとつのまとまった世界を形成している。また、章と章のあいだには、園長と馬たちのやりとりが挿入され、次のエピソードへとつなぐ役割を果たしているが、馬たちのリーダー格であるしたたかなプロスタクワーシャのコメントなど、外枠にあたる部分にもユーモアがちりばめられ、読者は馬たちと一緒に話のつづきに期待しながら読み進むことができる。

(3) 『細菌ペーチカ』 Петька-микроб

細菌の男の子ペーチカを主人公にした全12話からなる一連のお話。ペーチカ自身はケフィール菌だが、家族や親戚、友達として、乳酸菌や病原菌など、有害無害の様々な菌と、細菌を研究する学者たちが登場する。登場する菌はみな擬人化され、人間と同じようにバスに乗ったり仕事に出かけたり食事をしたり着飾ったりするが、その反面、彼らが非常に小さな存在であることは何度も強調して書かれ、ミクロの存在である菌が人間と同じように暮らすことの矛盾がわざと取り出された上で、オステル特有の「屁理屈」によって説明づけられる。たとえば、第2話「ペーチカがどんなふうに研究されたか (Как Петьку изучали)」で、研究者たちがペーチカたち一家が住む水滴を持ち帰り、顕微鏡でのぞいて調べるときの描写は、次のように書かれている。

顕微鏡は双眼鏡といっしょで、片側からのぞくと大きく、反対側からのぞくと小さく見えます。それで、顕微鏡の一方の端に研究者たち、もう一方に菌たちが集まったら、菌は大きく拡大され、研究者たちは縮小されて、両方とも同じ大きさになりました。もちろん本当に同じ大きさになったわけじゃなくて、顕微鏡をのぞいたときだけです。(c.6)

研究者がミクロの菌と交流するという非現実的な設定が、顕微鏡の特性についての「正しい」理屈によって正当化される。こうして「同じ大きさ」になった研究者と菌は、互いに観察しあい、話を交わすことができるようになる。

また、第11話「理論の入ったかばん (Портфель с теорией)」では、ペーチカ一家の水滴を“細菌についての理論が入った書類かばん”を持った学者が訪問し、次のような議論が繰り広げられる。理論家：「お宅の息子さん(註：ペーチカの兄のこと)は乳製品工場で働いているそうすな、しかし、菌というのは非常に小さいものなのに、遠くの工場まで

どうやって通勤できるんです？」ペーチカ：「バスで通ってるんだ」理論家：「理論的に不可能です！だって、バスは大きいのに、あんたがた菌は小さい」ペーチカの父：「こんがらがっていらっしゃるようですね。もし菌が大きくてバスが小さいというのなら乗れないですが、反対ですから問題ないんです。」つぎに、理論家が「顕微鏡なしでは見えないのに、車掌はどうやって検札するんです」と質問すると、ペーチカが再びしゃしゃり出て、細菌は確かに小さくて見えないけれど、チケットはちゃんと見えるため、車掌は持ち主のいないチケットを見て、すぐに細菌が乗っているのだと理解できると説明する。さらに理論家が「菌は液体の中でしか生きられないのに、乾いたところにある工場にどうして行けるんだ」と食い下がると、ペーチカは逆に、「おじさんは道路に住んだりできる？住めなくても通るだけならできるでしょ？ぼくらだっていっしょだよ！」と反論し、学者をすっかり言い負かしてしまう。こうして、一見理にかなわないことが、別の次元に議論をすりかえることによって巧みに説明付けられ、正当化されてしまうのである。

この中に登場する研究者たちは、いずれも、単純で子供っぽく、しばしばペーチカの頓知に助けられる。尊敬の対象となるはずの学者や警察官が、善良だが間抜けな存在として描かれるのは、オステルの作品によく見られる特徴のひとつである。それには、高位のものを貶めることによる笑いを狙う効果があるといえるが、この作品では、研究者たちが登場することによって、菌の菌としての特性が呈示され、物語を通していろいろな菌やマイクロの世界を自然と学ぶことができるという教育的な要素が与えられている。教育的要素という点では、世の中にはいろいろな菌があることを学ばせるだけでなく、「生水には菌が入っているからそのまま飲んではいけない」「一度にたくさんアイスクリームを食べると病気になる」といった教訓もさりげなく書き込まれているが、いずれの場合も“細菌の側からの視点”で書かれているため、教訓的な匂いが取り除かれている。細菌を主人公にするということ自体、すでにオステルらしい独自の発想だが、さらにそれが「細菌の世界」などというありがちな科学物語でもなく、単に擬人化された菌が活躍する寓話でもなく、その両方の側面が結びついた楽しい物語に仕上げられている。教訓の押し付けがまさや学問の退屈さを極力感じさせまいとするオステルのスタイルを、ここにもみることができる。

(4) 『悪い子のすすめ』 Вредные советы

最近、学者たちが、世の中には、何もかも言われたことと反対のことをする、言うことを聞かない子供がたくさんいると発見しました。(中略)そこで学者たちは、そんな子供には、良いことを教えるのではなく、悪いことを教えればいいのだ、と考えました。そうすれば、子供達は教えられたことと反対にちょうど正しいことをするというわけです。

上に挙げた序文に明確に示されている通り、この本のコンセプトは、一般的な「教訓」とは逆に子供の悪戯心をそそのかす助言を集めたものである。作者は子供なら誰にでも身に覚えがある悪戯や禁じられた行為に対する誘惑をとりあげてそそのかし、ときにはもっともな理由をつけて正当化する。その際に用いられる視点は相手の気持ちを無視したエゴイ

スチックな見方だが、そそのかされる悪戯は明らかな悪徳であるため、これらの「助言」を真に受けることはありえない。呈示される常識的な教訓の内容が明確であればあるほど、それがナンセンスな論理構造によってくつがえされたとき、より効果的に笑いがもたらされる。逆にあまりにも明白な悪が正当化されることによって、「ではなぜそれをしてはいけないのか」を考えさせる効果がある（かもしれない）。

ちなみに、続編にあたる『悪い子のすすめ2』の序文は、次のようになっている。

以前、学者たちは、「悪い子のすすめ」を読んでいいのは、何でも言われたことの反対をするわからずやの子供だけだと考えていました。そういう子供は「悪い子のすすめ」を聞いて、言われたことと反対のこと、つまりちょうど正しいことをするからです。ところが最近、学者たちは、ちゃんと言うことを聞く子供たちも、「悪い子のすすめ」は必要なんじゃないかということに気づきました。どうやら、「悪い子のすすめ」は、言うことをよく聞く子供には、予防注射みたいな効き目があるらしい。だから今はもう言うことを聞く子も聞かない子も一緒に「悪い子のすすめ」を読んでもいいんです。

さらに、『悪い子のすすめ3』では、これを受け、言うことを聞く子も読んで構わないが、念のため椅子に縛り付けて置いたほうがいい（そうしないと、言うことを聞いて悪いことをしはじめめるから）という助言が載せられている。

もともと詩人を志していたオステルだが、子供向けの作品のほとんどは散文で書かれている。その例外が代表作「悪い子のすすめ」シリーズである。内容的には単純でばかばかしい「助言」が、リズムカルな詩の形をとっていることにより、独特のユーモアをもった味わいが生まれる。

Нет приятнее занятия, Чем в носу поковырять. Всем ужасно интересно, Что там спрятано внутри. А кому смотреть противно, Тот пускай и не глядит. Мы же в нос к нему не лезем, Пусть и он не пристаёт.	この世で一番たのしいのは 鼻くそほじりにきまつてる。 だってみんな興味しんしん 中には何があるのかな。 見るのがやだっていうやつは 見てくれなくてもいいんだぜ。 そいつの鼻じゃないんだから そっとしといてほしいよね。
--	---

この小詩は人気作品『悪い子のすすめ』の中でも最も頻繁に引用される。内容的にはどうということもないが、子供の単純な欲望を「何がかくれているか知りたい」という興味によって正当化し、「だってママの（パパの、先生の…）鼻じゃないんだから、ほっといてよ！」「僕の（私の）鼻なんだから何しよう勝手にしょ！」という声にならない思いを言語化することで、小気味よい読後感もたらされている。さらに問題を広げて考えれば、この詩は、他人のことにおせっかいを焼きたがるロシア人の気質を揶揄するものともいえるだ

ろう¹¹。とはいえ、この「助言」の場合、読者の笑いをさそうのは、やはり内容そのものよりも形式（詩）と内容のギャップだ。

汚いものやタブー、一般的にやってはいけないといわれることがもつ魅力をわざと取り上げるのは、オステルの作品の目立った特徴のひとつである。『悪い子のすすめ』では、ふだんやってはいけないと言われていることが、反対にやるべきこととして勧められる。とはいえ、オステルはただ理由もなく悪いことをそそのかすのではなく、それにナンセンスな説明や理屈をつけたり、悪いことを過度に誇張したりすることにより、逆説的な笑いを生みだす。

ナンセンスな理由付けには、いくつかのパターンがあるが、まず挙げられるのは、いつも大人が子供に言う文句の誇大解釈である。（「家族みんなで一緒に…」 「もし知り合いの家によばれても」など。）また、「友達を殴ろう…」 「きみの家が／火事になったりしないよう…」 などでは、将来のほとんどありえない災難を防ぐことがもっともらしい理由として用いられ、目先の行為が正当化されている。子供が好きな悪戯やわがままにも、様々なこじつけの理由が与えられる（「お気に入りのいたずらが…」 など）。

無意味な繰り返し（「色の濃いさくらんぼジュースと…」 など）やナンセンスなパラドクスを用いた、ハルムス風の「助言」もある。「友達と一緒に／中庭で遊んでて…」 では、「新しいコートを汚してはいけない」というありふれた概念が、「汚していけないのは新しいからこそである」 → 「新しくなければ汚してもいい」 → 「それなら新しくないものにするために汚してしまえばいい」というナンセンスな論理によってくつがえされている。さらに①新しいコートを着ているときにしてはいけないこと②新しくないものにするためにしなくてはいけないこと③コートが新しくなくなったからしても大丈夫なこと、という三つの部分に、まったく同じ行為（水たまりに飛び込む、地面を転げまわる、塀によじ登ってコートを釘にひっかける）が繰り返されることにより、ナンセンス度がより高まっている。

『悪い子のすすめ』に描かれている子供は、鼻くそをほじり、おもちゃや食べ物を買って欲しいと駄々をこね、昆虫をいじめて遊び、うるさいおしゃべりで大人を困らせ、家の中で自転車を乗り回し、壁に落書きをし、夜になってもなかなか寝ようとせず、しかられれば生意気な口答えをする。一見すると単純な子供の悪戯心や子供特有の残虐さを描いているようだが、その裏にはしばしば、子供に限らず人間が持っている悪に対する誘惑が潜んでいる。「クリスマス会に出たら…」 でサンタクロースのおじさんや両親が子供のおやつを横取りする存在として描かれるのは、欲張りな子供が自分の価値観で周りの世界を眺めているからだ、強欲さは子供だけに限らず、誰でも持っている悪徳だ。『悪い子のすすめ』で表面的に描かれているのはごくふつうの子供の日常だが、比喩や比較の対象としてしばしば「捕虜になったパルチザン」「密告」「戦争」「赤十字」などの言葉が用いられ、それに

¹¹ オステルは作品の翻訳にまつわる苦勞を訊かれて、アメリカとロシアの国民性の違いを説明するためにこの作品を例に用いている。「アメリカで出すときにはこの作品を「もしきみらがぼくらの鼻の中に興味をもたないなら、ぼくらもきみらの鼻の中のをぞきこんだりしない」というニュアンスで訳します。お互いの国によって問題が違うからです。ロシアでは他人のことに口を突っ込んでそっとしておいてくれないことが問題ですが、アメリカでは逆に、もっと自分のことに関心を持ってもらいたいと思っているのです。」(Смешное – оно разное...// <http://www.redactor.ru/replic/oster.shtml>)

よって大人の社会に対する強い諷刺の意味が与えられている。

高い政治的寓意性・諷刺性がこめられているのは、『悪い子のすすめ』の特徴のひとつである。オステルは、自分の作品に込められた寓意や政治的意図を積極的に肯定し、次のように語っている。「私が生涯やってきたことはまさに一種の政治です。全体主義国家における作家の仕事とは、最初から最後まで政治なのです。今だってそうです。俗っぽく響くのを恐れずに言わせてもらえば、子供のために書くとき、私は子供たちの民主的価値観を育てているのです。私の本を読んで育った子供は、大きくなって絶対には共産党には投票しないでしょうし、彼らは簡単にはだまされないでしょう。」¹²

特に秀逸なのは、ソ連時代の国歌をパロディーにした次のような「助言」である。元の歌詞とオステルの作品を比べてみればわかるように、オステルは元になっている歌詞のテクストをうまく利用し、語順やシンタクスを変えて巧みに組み合わせることによって、ソ連時代を知る人間なら誰でも知っている歌を諧謔に満ちたパロディ作品に仕上げている。

«Интернационал»

Вставай проклятем заклеяменный,
Весь мир голодных и рабов!
Кипит наш разум возмущённый
И в смертный бой вести готов.
Весь мир насилия мы разрушим
До основанья, а затем
Мы наш, мы новый мир построим,
Кто был ничем, тот станет всем!

(翻訳)

起て、呪いに凍りつきし者たちよ
飢えたる者 奴隷たちよ 起て
昂ぶりし我らの理性は沸き立ち
決死の戦をも厭わぬ
暴力に満ちた世界を、我らは打ち砕かん
その礎に至るまで。しかるのちに
我らは我らの新しき世界を打ち立てん
何物でもなかりし者が、いま全てとなる

«Вредные советы»

Если ты весь мир насилия
Собираешься разрушить,
И при этом стать мечтаешь
Всем, не будучи ничем,
Смело двигайся за нами
По проложенной дороге,
Мы тебе дорогу эту
Можем даже уступить.

(翻訳)

もしきみが暴力にみちた世界を
打ち砕こうとするのなら、
それでいて何物でもない
みんなと同じ人間でいたいなら、
勇気を出してぼくらの後についてこい
ぼくらが切り開いた道を通して。
なんならこの道をそっくり
明け渡してあげてもいいよ。

「何物でもないみんなと同じ人間でいたいなら」という言葉に込められた寓意や、「なんならこの道(=ソ連の辿った道)をそっくり明け渡してあげてもいい」というフレーズの皮肉は、説明するまでもないだろう。

¹² «Смешное – оно разное...»

もっと複雑なのは 1944 年以降のソ連国歌をパロディーにした次のような作品である。

«Гимн СССР»

Союз нерушимый республик свободных
Сплотила навеки великая Русь
Да здравствует созданный волей народов
Великий, могучий Советский Союз!

Припев:

Славься Отечество наше свободное,
Дружбы народов надежный оплот
Партия Ленина - сила народная
Нас к торжеству коммунизма ведет!

Сквозь грозы сияло нам солнце свободы,
И Ленин великий нам путь озарил!
На правое дело он поднял народ
На труд и на подвиги нас вдохновил!

«Вредные советы»

Если вас навек сплотили,
Озарили и ведут,
Не пытайтесь уклониться
От движенья к торжеству.
Все равно на труд поднимет
И на подвиг вдохновит
Вас великий и могучий,
И надежный наш оплот.

原文に付した下線を見ればわかるように、ほとんどの単語が元の国家の歌詞から取られているが、内容は完全にひっくり返され、個人の自由を許さないソ連体制に対する痛烈な批判となっている。

(5) 『算数の問題集—教科書っぽくない教科書』 Задачник. Ненаглядное пособие по математике

これは、退屈な算数を楽しいものにしようとする試みで、全 327 問の問題は、どれもちゃんと解くことができる算数の「文章題」となっている。とはいえ、その中身は『悪い子のすすめ』同様、グロテスクで、ちょっと毒気のあるひねりのきいたユーモアがあふれたものばかりだ。問題の中に登場する子供たちはみな、わがままでよくばりないたずらっ子たちで、友達のお菓子を分捕ったり、お母さんが大切に育てているサボテンのトゲをパパの髭剃りで剃ってしまったりする。

オステル自身はこれは問題集ではなく、問題集の形をした文学作品だと主張している¹³。とはいえ、不条理なユーモアが他にもない数の概念そのものに依存している問題も多く、中には答えを出してみても初めて面白みがわかるものもある。たとえば、こんな問題だ。

450 人収容できるホールである劇を上演したとき、15 の列では 1 番から 25 番までが空席、3 つの列では 2 番から 24 番までが空いていました。この劇を見に来たお客さんは全部で何人いたでしょうか。

¹³ Игры по правилам, игра против правил. (<http://style.narod.interview/oster.html>)

計算してみれば、450の座席のうち、たった9つの席しか埋まっていないことがわかる。

次の問題では、まずひとりで27個の梨を食べるという設定自体、27個という数をイメージできれば、かなりおかしい。さらに、木に生っている梨と、木にぶら下がって梨を盗み食いしている男の子という、次元の違う二つの対象が、どちらも「木からとれた（採れた・捕れた）」ものとして同じレベルで扱われている。

一本の木から164個の梨がとれました。2本目の木からは、5人の男の子を捕まえました。男の子はみんな木に登って、ひとり27個ずつ梨を食べたところでした。2本目の木には、まだ94個の梨が残っていました。2本の木を合わせたら、全部で何個の梨になっていたのでしょうか。

次元の異なるものを並列させるのは、オステルがしばしば用いる手法である。『算数の問題集』では、そうしたオステルの手法や常識にとらわれない自由な発想がふんだんに発揮され、子供の重さと子供が食べるお菓子の重さ（問題7）歩かなくてはならない距離と、靴の中で飛び出して歩くじゃまをしている釘の長さ（問題49）など、ふつうの感覚では比べられないもの同士が比べられている。

ありえない設定の不条理さによってもたらされるユーモアと同時に、実生活でありがちだが通常の「算数の問題」では無視されてしまうことを書くことによって、笑いの効果を狙うものも多い。問題23の「抜かれた歯を家に持って帰った子供」などはその良い例である。

オステルが得意とする言葉遊びが盛り込まれた問題もある。問題21では、主語をサーカスの曲芸師に設定することにより、「世話になる、すねをかじる」という意味で用いられる“сидеть на шее”というロシア語の表現が、文字通りの「肩（ロシア語の表現では首）の上に乗っかっている」という意味を意識させる。読む者は芸人アルチョームの肩に家族全員が乗っているところを想像し、同時に、家族を養うことの大変さを思うのである。

死、暴力、犯罪、病気などをテーマに取り上げたものも多いが、いずれの場合でも、グロテスクなイメージが前面に押し出されたり、ステレオタイプと矛盾するイメージが付け加えられ、ユーモアが与えられている。たとえば、次のような問題で「ダイエット中の」という一言があるかないかで、与えられる印象はまったく違ったものになるはずだ。

ダイエット中の人食い鬼は一日にやせっぽちの男の子二人と女の子三人を食べます。三十二人の男の子と六十人の女の子がいるとしたら、何日分の食事に足りるでしょうか？

3. まとめにかえて

少し前の話になるが、2000年12月7日の朝日新聞の社会面に、こんな記事が載った。「子供7人ずつ縛るのにロープ何本？「不適切な宿題」と学校謝罪」という見出しがついたその記事は、宮城県のある小学校の算数の宿題プリントに「796人の子供を7人ずつロープで

しばっていく。さて、何本ロープが必要か」「651 人の子供にワニのいる池に 6 人ずつ手をつないで取り込んでもらう。6 人組はいくつできるか」といった問題があったのに対し、子供たちの父母が教育委員会に抗議を寄せ、学校側が謝罪したという内容である。記事によれば、それらの問題は、「魔女に奪われた城を割り算の問題を解きながら奪い返していくストーリー」の教材から、教師が部分的に抜粋して使ったのだという。

この記事を読んだとき、筆者は、オステルの作品をすぐに連想し、オステルの本がミリオンセラーとなるロシアの自由さに比べて、日本の教育現場はなんと窮屈で堅苦しいのかと思ったものだ。しかし、考えてみれば、上の記事で「配慮を欠いている」とされた教師がするのを怠った“配慮”とは、コンテクストを無視して問題だけを抜粋したことに起因している。逆に、オステルの作品が、その「けしからぬ」内容にもかかわらず、広く受け入れられるのは、常識にとらわれない自由な発想とユーモアがあるからだ。

とはいえ、生意気な子供たち（“餓鬼ども”と言ったほうがいいのかもしい）が闊歩するオステルの作品の面白さは認めても、自分の子供に『悪い子のすすめ』を読んで聞かせるには勇気がある。子供に生まれつき備わったユーモアを解する能力を信じるとはいえ、オステルの「魔のささやき」はあまりにも魅力的だ。子供たちにはやはり、素直で純真であってほしい。それとも、そんな願いは、「全ての人が平等で幸福なユートピア社会」同様、夢でしかないのだろうか。

本稿では、オステルの作品のいくつかについて、内容や文体の特徴をまとめてみたが、オステルの作品の面白さを伝えるには、分析より実際の作品を読んでもらうのが一番だろう。というわけで、最後にいくつかの作品の翻訳を載せる。お楽しみいただければ幸いです。

グリゴリー・オステル 作品選

『悪い子のすすめ』より

家族みんなで一緒に
川に泳ぎに行ったなら
パパとママの日光浴
けっして邪魔しちゃいけないよ。
きゃあきゃあ騒ぐなんてもってのほか。
大人は休ませてあげなくちゃ。
うるさくしたりしないで
静かに溺れてしまおうぜ。

* * *

知り合いの家によばれても
挨拶なんてしちゃいけない。
「どうぞ」とか「ありがとう」なんて
誰にも言っちゃいけないし
何か訊かれたときにでも
ぜったい答えちゃいけないよ。
そしたらおしゃべりな子だなんて
怒られたりもしないもん。

* * *

友達と一緒に
中庭で遊んでて
その日の朝からおろしたての
新しいコートを着ていたら
水たまりでばしゃばしゃ
地面をごろごろしちゃいけない
塀をよじのぼって
釘にコートをひっかけてもいけない。
新しいコートを
破ったり汚したりしないには
まず新しいのを古くしなくちゃ。
やり方を教えてあげよう。
水たまりにいきなり飛び込んで
地面を転げまわって

それからしばらく
塀に突き出した釘にひっかかっててごらん。
新しいコートも
あつという間に古くなる。
そしたらもう安心して
中庭で大あばれできるだろ？
水たまりでばしゃばしゃやったって
地面をごろごろ転がったって
塀をよじのぼって
釘にコートをひっかけたってへいちゃらさ。

* * *

友達を殴ろう
毎日三十分ずつ欠かさずに
そしたら君の筋肉は
レンガみたいに強くなる。
そしたらその強い腕で
いざ敵が襲ってきて
たいへんなときに
友達を守ってあげられる。

* * *

きみが迷子になったとき
決して忘れちゃいけないのは
自分の住所を教えたおたん、
家に連れ戻されちゃうこと。
頭を使って答えなきゃ
「ぼくの家はヤシの木が生えてサルがいる
遠い南の島なんだ」って。
迷子になった子供たちは
よほどのとんまじゃないかぎり
絶好のチャンスをものにして
いろんな国に行ってみるものさ。

* * *

お気に入りのいたずらが
ママにみつかったとき
たとえば、落書きを
廊下の壁にしちゃったとき
そんなときにはこう言おう
「これは母の日のプレゼント
ママを驚かせようと思って描いた
『大好きなママ』っていう絵なんだ」

* * *

もし一番の仲良しが
すべってころんでしまったら
その子のことを指差して
げらげら笑ってやるといい。
水たまりにはまった友達に見せてやれ
君がちっとも悲しんでないところを。
だって本物の友達なら
自分の友達を悲しませたくないはずだもの。

* * *

きみの家が
火事になったりしないよう
家を出るときには
アイロンを持って出よう。
掃除機やホットプレート、
テレビに電気スタンド
できたら電球も一緒に
となりの庭に持ち出そう。
もっと念を入れるなら
電線もみな切っちゃおう。
きみが住んでる地域ごと
いっせいに停電するように。
そしたらきみも
ほっとひと安心。
きみんちの火の用心は
これでもうばっちりさ。

* * *

色の濃いさくらんぼジュースと
ママの白い上着を用意しましょう。
ジュースを上着にそっとこぼすと
染みができます。
そうしたら、染みが
ママの上着からなくなるように
上着をそっくりそのまま
ジュースの中につけてしまいましょう。
次は、さくらんぼ色になったママの上着と
ミルクをコップ一杯用意します。
ミルクをそっとかけると
染みができます。
そうしたら、染みが
ママの上着からなくなるように
上着をそっくりそのまま
ミルクを入れた鍋に入れましょう。
色の濃い
さくらんぼのジュースと
ママの白い上着を用意して
そっとこぼすと…

* * *

台所でゴキブリが
机を行進していたら
ねずみたちが床の上で
教科訓練をしていたら
世界平和をとりもどす戦争は
ちょっとのあいだ休戦して
きれいな台所をとりもどすために
全戦力をつぎこもう

* * *

カエルを棒でなぐってみよう。
そりゃあすごく面白いぜ。
ハエの羽をむしってやるのもいいな。
なあに、やつらは歩けばいいのさ。

毎日そうやって鍛えていけば
いつか君にチャンスがまわってきて
どこかの帝国で
一番えらい処刑人になれるかもしれない。

* * *

ママが君を
歯医者に連れて行こうとしたら
ママにぐずぐず言ったり
めそめそしたってしかたない。
じっと黙ったまま、捕虜になったパルチザ
ンみたいに
歯をしっかりと食いしばるんだ。
歯医者がどんなに寄ってたかっても

こじあけられないようにね。

* * *

クリスマス会に出たら
まっさきにプレゼントをもらって
サンタクロースのおじさんが
飴をこっそりよこどりしてないかどうか
しっかり目を光らせよう。
もらったお菓子はばかしょうじきに
そのまま家に持って帰っちゃいけない。
パパとママにあつというまに
半分とられちゃうからね。

『算数の問題集』より

* 数字は原文に付けられた番号に準じる。

1. 消防士は 3 秒でズボンをはけるように訓練を受けます。ちゃんと訓練を受けた消防士は、5 分間でズボンを何本はけるのでしょうか。
2. おじいちゃんとお父さんの後ろからそっとしのびよって、いきなり「わあーっ」とさげんだら、お父さんは 18 cm とびあがりました。辛い時代を生き延びてきたおじいさんは 5 cm しか飛び上がりませんでした。いきなり「わあーっ」という叫び声をきかされて、お父さんはおじいさんより何 cm 高く飛びあがったのかな。
7. てんびんの片方に、体重 45 キロのダーシャと、ダーシャよりも 8 キロ軽いナターシャをのせます。もう片方には、89 キロ分のキャンディをのせます。てんびんがつりあうようにするには、かわいそうなこの女の子達は、いったい何キロ分のキャンディを食べなきゃいけないのでしょうか。
8. ペーチャは長さ 60 キロメートルのまずーいマカロニを食べています。1 日目には全部の 5 分の 1 を食べました。2 日目には、全部の 4 分の 1 を食べました。2 日間でまずいマカロニをいったい何キロメートル食べたのかな？
9. 特製のケースに 68 個の大きな卵を詰めることができます。足で卵をふみつぶしたとしたら、その 100 倍の数が入ります。このケース 3 つぶんに、足でふみつぶした卵をいくつ入れることができるかな？
10. めんどりさんが卵をひとつ産みました。ねずみが走ってきて、卵を割ってしまいました。めんどりさんは、それから 3 つの卵を産みましたが、これもねずみがみんな割ってしまいました。めんどりさんは、もうひとつふんばりしてまた 5 つ生んだのに、恥

知らずのねずみはこれもぐちゃぐちゃに割ってしまいました。もしもおじいさんとおばあさんがねずみをこんなふうに甘やかしてやりたい放題にさせなかったとしたら、いくつの卵で目玉焼きを作れたでしょうか。

20. ママがサボテンをいくつか手に入れました。3歳のマーシャが、パパのひげそりで、ママのサボテンの半分をていねいにそり終わったとき、チクチクするひげがついているのはあと12個でした。ママはひげの生えたサボテンを全部でいくつ持って帰ったのかな。
21. サーカスの芸人フヂューシェンコの肩の上に、奥さんのエリヴィルと、もう大人になった娘アーシャとターシャと、3人のまだ小さい息子たちミーシャ、グリーシャ、チーシャが乗っかっています。彼の肩にかかっている家族の数は全部で何人いるのかな。
23. 歯医者さんは2年A組の子供たちから全部で12本の乳歯を抜きました。その後、2年B組が診察室に入って、A組より4本多い乳歯が抜かれました。二つのクラスをあわせたら、歯医者さんの診察室に残された乳歯の数は全部で何本でしょうか。ただし、二年生のひとりは、抜かれた自分の歯を家に持って帰ったみたいです。
26. ある水1滴の中には4468個のばい菌がはいっています。別の一滴にはそれより2倍多いばい菌が入っています。2滴めに入っているのは2滴めの4分の1です。世界的に有名な学者、インノケンティ先生がこの水をカノコソウインキ（鎮静剤）と間違えてひといきに飲み干してしまったとしたら、ぜんぶでいくつの菌が先生の身体に巣食うことになるでしょう。
28. 40人のばあちゃんたちが、バイクに乗ってツーリングに出かけました。いちばん先頭にはいちばんすばしっこいおばあちゃんが、エンジンの消音機をはずしたバイクに乗って、みんなに差をつけて飛ばしています。その後ろをそれぞれ三人ずつのおばあちゃんを乗せた補助輪付きのバイク3台が続きます。残りのおばあちゃんたちはそのまた後ろを二人乗りで走っています。このおばあちゃんたちが持っていたバイクの数は全部で何台？
49. ある人が歩いて旅にでて45kmの距離を制覇しようとしていましたが、左の靴の中に飛び出している小さな釘がじゃまになってうまく歩けません。釘の長さは1cmです。この人が制覇しようとしていた距離はじゃまをしているこの釘の長さの何倍ですか。
50. サーシャ・チョールノフは宿題をやるうとして机の前に2時間座っていました。そのうち20分間は、アイスクリームが食べたいなあとと思いながら鼻をほじっていました。10分間は引出しの中をごそごそやって消しゴムを探していました。40分かけて地理の教科書に書いた落書きを消すためです。残りの時間はフランス語の動詞を活用させていました。サーシャがひとつの動詞を活用させるのに25分かかるとしたら、いくつの動詞の活用ができあがったでしょうか。